

---

# 選ぶ世界のその先に

如月しん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

選ぶ世界のその先に

### 【Zコード】

Z8579Z

### 【作者名】

如月しん

### 【あらすじ】

ある日突然、『勇者召喚』というものに巻き込まれ、常識以前に言葉の通じないファンタジーな世界へと渡ってしまったゼン。この異世界で生きることを決めたはいいけれど、右も左もわからず…。それでも恩返し（？）のために奮闘（？）します！

（基本、ゼンの一人称です。のついたタイトルは別の登場人物視点になります。\* 次回投稿は活動報告を参照）

## その選択に世界は歓喜する《1》

その日。

冬の冷たさも、柔らかな口差しに和らいだ午後。

オレは、クラスメイトである深沢結果ふがざわ ゆいかを探して校内を歩き回っていた。

…が、なかなか見つからない。

（あー…………もう帰ろつかな……いないし）

諦めて外に出ようとしたところ、逆に校舎内に入ってきた本人をやつと見つけ声をかけた。

「深沢。悪い、これ渡し忘れてた」

そう言ってプリントを示しつつ近づいてくるオレに、深沢は一瞬、誰だっけ?という表情をした。

（一年近くも同じクラスだったんだから顔ぐらいは覚えてて欲しいなー）

と、思う。

別にオレの存在感が薄いわけではなく（薄くはないと信じたい）、もちろん深沢の記憶力が悪いわけでもない。挨拶をする程の接点もなく、好き嫌いの感情を覚える程距離が近くなかつただけだ。

スポーツ万能で男女問わず人気のある爽やかな性格の深沢と、勉強運動共に平均ぐらいならいいや～とつい思つて頑張りの足りない（自覚はある）オレ。

行動範囲と視野が全く重ならなかつたオレたちは、良くも悪くもそこにあるだけの…ただのクラスメイトだつた。

「ああ、高崎。わざわざ有難う」

顔と、ついでに名前も思いだしたらしく深沢が、女性にしては少し低い声を柔らかな笑みにのせた。

「いや、忘れてたのこつちだし。今日は部活は？」

渡してハイさよなら。とこいつのはビーナンだらうへと思つて話題を振つてみる。

別に相手が苦手だと嫌いだとかいうわけじゃないのだ。ただ話す機会がなかつた（もしくは作らなかつた）だけで…。

「今から。教室に忘れ物して…取りに帰る途中」

そう言つて、軽く苦笑する深沢。

「なんだ」

似たような行動をしてる深沢に、親近感を覚えてオレも同じ笑みを返す。

ただ、それだけ。

意味のない、ただの世間話。

オレにとつても、たぶん深沢にとつても。

何か特別なことをしたわけではなかつたのに……

「「え？」」

そう口にしたのは、二人同時だつた。

田の前にあるお互ひの姿を見て、次いで自分の姿を確認して。

なぜか周囲の風景に溶けるように霞んでいく身体。見えるはずのない、自分の身体の向こうが見える事実に、二人とも言葉を発することができないまま、ただ茫然とそれを見つめていた。世界が消えるまで。

……いや消えたのはオレたちのほか。

周りに人がいなかつたのは良かつたのか悪かつたのか……いたらもつと喚けたのになーと、ちょっとだけ思つた。

## その選択に世界は歓喜する《一》（後書き）

### 【登場人物】

高崎 全  
タカザキ ゼン

男。 16歳。

一応、主人公。

勉強も運動も良くもなく悪くもない平均あたり。

頑張りが足りないという自覚はある。が、特に不都合も無いのでは  
るするとそのまま。

深沢 結果  
フカザワ コイカ

女。 16歳。

高崎のクラスメイト。

勉強より運動が得意。爽やかで裏表のない性格のためか、女性にし  
ては低めの声も合わせて男女年齢問わず受けがいい。

## その選択に世界は歓喜する《2》

気がついたら地面に両足ついて立っていた。（いや、今まで立っていたから、その表現はおかしいかもだけど…）

とりあえず両手をにぎにぎして感覚を確かめつつ身体の向こうが透けて見えないと確認する。

（うん。透けてない霞んじゃない大丈夫。……だけど…）

床を見つめる。

俯いた視界は広くはないが、見える床一面に赤い絨毯のよつたものが敷かれてある。

（なんで赤い絨毯？？）

「――――、――」

突然、話しかけられて慌てて顔を上げる。

（「お～う。金髪碧眼美少女つーー！」）

さうさうの手触りの良さそうな長い髪、布をたつぱりと使った白衣。可憐さの中に凛とした気配を同居させた少女がそこにいた。

（どつかのお嬢様か？なんか後ろに取り巻きとボディーガードっぽい人がいるし…）

その全員が、美少女と同じような外見と服装をしていた。

しかも華美ではないが、装飾品をいくつか身につけている。

（変わった趣味だな。コスプレなのか？なんとなくだけど高そうだ  
な／特に装飾品）

「えっと……誰……ですか？」

失礼にも初対面の人たちを品定めしているオレの横で、深沢は明らかに日本人ではない彼らに戸惑いつつも話しかける。

「――――。――――。――――？」

（民族衣装なのか？ていうかあの髪と服、長すぎだよな／絶対引くよ。汚れるのとか気にしないのかな？）

相手の言葉がわからないのをいいことに、品定めを続行するオレ。深沢も言葉がわからないらしく、オレに戸惑つたまま視線を送つてくれる。

わかる？

視線のみで話しかけてくる深沢に、わからないといつ意味を込めて肩をすくめてみせる。

オレたちのジエスチャーの意味を間違いなく美少女たちも理解したようだったが、そもそも最初から言葉が通じないことがわかつていたのか、お構いなしに話しかけてくる。

「――――。――――。――――」

それはさておき。

どうあっても理解できやうもない言葉を聞き流しつつ、たつた今気づいてしまったものを見なかつたことにするべきかオレは悩む。

（あ～……オレってば視力がいいのって割と血運だったりするんだけど……）

視線は窓の外。

踏み締める赤い絨毯も、年期の入つた石造りの室内も、緻密な意匠を施された窓枠にもツツコミたい気分なのだが、それより……

（島が浮いてる……）

窓からはまだ高い位置にある太陽と青い空が見えていた。大地は見えない。

遠田にだが、その空に浮いた島には豊かな緑があるように見え、そこから落ちる水（川？）が太陽の光を反射して幻想的に煌めいていた。もしかしたら自分の今いるこの場所は高い所にあるのかもしれない、と思う。

自分は校舎の一階にいたはずだ、とか、時間帯は夕方に近かつたはず、とか、そもそも島は浮かないだろ、とかきっと気にしてはいけないんだろう。

（うん、きっとそうだ。自分は夢を見るんだ。もしくはリアルなアトラクションについての間にか連れて来られたんだ。もしかしたら異世界かもなんて、まかり間違つてもそんな期待をしたらダメなんだ！）

わけのわからないことを考えながらもかなり期待しつつ、外見は平

静を保つ。

だつてもしかしたら「」はかの有名な勇者召喚イベントかもしけないんだ。もしかしたらもしかして勇者になれるかもしないのだ。ヘタな態度は避けたほうが無難だつ。

（きっと勇者だつたらいついかなる時でも取り乱したりはしないんだろう。貴方は勇者ですから魔王を倒してきてください、とか言われても大丈夫なように心の準備をしておこう。うんうん。）

見知らぬ場所＝異世界＝勇者召喚。などと、妄想とも言つ思い込みを發揮し、小説の中の主人公になつた気分で興奮していると、

「えつと……――――――？」

深沢がいきなりわからなかつたはずの言語で話しあじめた。

（…………いやわかつてたけどや。『勇者えたつて勇者は深沢のほうだつて。…………そうなると自分は魔王か？…………いやだからわかつてるよ？器じやないつて。…………せめて勇者の従者とかのポジションに付けないかな～』）

深沢は言葉を理解したらしいが自分はまつたく何を言つてているのか理解できないので（深沢はオレとは頭の出来が違うらしい）、美少女たちと深沢が話している間のヒマつぶしにどうでもいこいとを考えてみる。

異世界だとか勇者だとかはオレの願望だ。最近そういうた内容の小説を読んでいたから自分に当てはめて、だつたらいいな～と妄想してみただけだ。

だつて本当にヒマなんだよ。…つーか、『』だよ？

見たかんじ、RPGとかでよくあるようなファンタジーっぽい所。

中世ヨーロッパ風？

どこのアトリエクションだよ。

言葉がわからないから会話に混ざれないし。一体何がどうなってるのか聞こつにも、深沢は美少女たちとの会話で忙しそうだし。

「高崎。言葉……わかる？」

「（ん？何、やつと通訳してくれる気になつたのか？）こや。全然。まつたぐ」

わかりません。と、言葉と態度で示す。  
ここで見栄張つてわかるとか言つたらバカすぎるだろ。むちむん（）の部分は口に出してないぞ？

「……あ～うん……なんていつか…。彼女たちが言ひこな、いじ  
は…えつと…異世界…らしき」

（…………マジで？）

マジですか？マジなんですか？……マジなんじょつね。

「（とりあえず頷いておけ）……へ～え」

「それで、えーと…。」

めずらしく（と言ふのせじ親しへはないけど…）深沢は言葉に詰ま  
りつつ説明してくれる。

簡単に言つと…

ここは異世界であり、召喚といつ儀式でもつて勇者を呼び、その勇者が深沢で、元の世界に帰るためには魔王を倒さなければいけない（魔王のポジションは埋まつてた）らしい…  
いわゆる、異世界トリップの王道パターンのようだ。

そしてこれが一番大事なこと。

オレのことについて、……どうやらオレってば単に召喚に巻き込まれただけ… のようだ……（金髪美少女はじめ皆が同情した顔をしていた）

……ああ そうかもなつて思つてたけどさ。

思つてたけどさつ

そんなに皆して可哀相な人を見るかのような目しなくてもよくない？  
傷痕に塩塗りたぐつてるつて自覚はもちろんあるんだろうな？

……ちくしょー。。。

せめて従者のポジション用意してくださー！

## その選択に世界は歓喜する《3》

くせつってても仕方ないので、駄目モード行動に移してみる。

「せめて従者ポジションを……」

魔王討伐なんて（たぶん勇者一人でやれる）そんな素敵イベントを見逃すわけにはいかない！ぜつたに特等席で見るのだつ！

「勇者なら足手まといの一人くらい余裕だろ？連れてけ」

なんだか偉そうなセリフになってしまったが、それを律儀に美少女へ通訳してくれたらしい深沢に、自分の心の狭さを思い知られたような気がしてなんだか悔しい。

だってあっちは勇者でこっちはただの巻き込まれ。つまり招かれざる客つてことだろ？

ハつ当たりしたくなつても仕方ねーよな？

……つーか、誰にイイワケしてんのオレ。

「高崎。まずは部屋を移動しましょう、だつて」

……いや、そんなキツチリ通訳してくれなくともいいんだけど……深沢つてほんと律儀だつたんだな……

先程の部屋から階段を下り通路を歩いた先にかなり広めの部屋（もちろんすべて石造り）があった。

「————」

美少女が何かを言つて深沢に棒のような細長いものを手渡す。それを深沢は躊躇うことなく引き抜いた。

……どうやらあれは剣だつたらしい。

剣つてもつと大きくて「口テ」「口テ」した装飾がされてるもんだとばかり思つてた。

（…つーか、剣つて。ホントにファンタジーだな。このぶんだと魔法もあるのか？）

期待でわくわくするな

やつぱ一度は使ってみたいよな？魔法つ！

ガキイイイイインッ！――！

いきなりの轟音にびびるオレ。

何事かと思つて見れば、深沢が美少女の護衛（？）の男の人と剣の打ち合いをしていた。

そしてあつせり圧勝してしまつ深沢。

（…………つわ……お約束なチート……羨ましそうのつ）

汗もかかない清々しさで、戻ってきた深沢はオレに剣の柄を向ける。

受け取れってことだよなーと思つたオレは素直に剣を握る。と同時に剣を離した深沢。

「つまわっ！」

あまりの重さに剣を落としてしまつた。いやまだ一応柄は握つてはいるが。

こんなに剣が重いとは思わなかつた。だつて深沢は普通に持つていたのだ。片手で。

（そりだつた…深沢は勇者なチートだつた…ん？いや待てよ？）

違和感があつたので記憶を巻き戻す。

……そりだつた…深沢に剣を渡したのは美少女だつた。片手ではなかつたが、それほど重そながんじではなかつた。

（と、こりこりとは？）

深沢（女）

金髪美少女（か弱そり）

……オレ？（最弱ーー？）

（いやいや待てオレ。そこは認めたる男の尊厳がなんとかかんとかだぞつ）

再度、剣を握る。

今度は力を入れて持ち上げてみる。

(「へ、腕がふるふるする…マジ重い）

言われなくてもわかる。

今の自分の格好は大変に情けないものであると。  
だから……

「「めん。高崎」

だから。

(横からたらりと奪つてくれじゃねーよつ！  
いやこんなクソ重いだけの剣なんて落としてやうつかと考えてたと  
こだつたけどセー！)

…………どうやら認めざるをえないようだ。  
そう、

(オレは前衛には向かない！…)

ならば後方支援。つまり、魔法だ。

「あるんだろ？魔法」

どつこつ理論展開だ、とか言われそしが気にしない。  
オレの言葉を深沢に通訳してもらつた美少女は、なにやら小さな宝  
石箱のよつなものを持ち出してきた。

「ツテツテに装飾された蓋を開けると、中には鏡のよつた反射板が埋め込まれていた。

その上に深沢が手を翳すと、視界すべてを覆い隠すよつたまばゆい光が溢れる。

数瞬のことだつたけれど、目に光が焼き付いて痛い。

「高崎も」

深沢に促され、オレも同じよつて反射板に手を翳す。

深沢と違い、一瞬だけ弱々しい光がほんの少しだけ立ち上る。先程の深沢の光の残滓のせいで、見間違いじゃないかと思えるくらいの脆弱な光だつた。

おそらく、一連の流れからして今やつたのは魔力測定ではないかと思われる。

（…………深沢、どんだけチートだよ……）

自分と深沢との力の差に呆れながら回りを見回すと、やはりとか……とってもとっても同情したふうな視線をみなさん送つてきていた。

美少女なんか、この世の終わりといつぐらの悲しげな表情をしている。

（え？あれ？深沢がすごいだけじゃないの？…逆？オレがダメだめなの？）

……ここでも認めなければいけないらしい。  
オレに魔法の才能はないのだと。

マージーかーよー

最弱決定？足手まとい決定つすか？？

はあ…頭くらしくたな

魔王退治…連れてつてもらえるかな

…

## その選択に世界は歓喜する《4》

勇者の従者にすらなれないと判明してしまったオレは、その後のこの世界についての説明を屍のようになつて右から左に聞き流していた。

言葉がわからないから、聞いても意味はなかつたし。

でも言葉を理解しようと努力はすべきだつたかな、とちよつとだけ思った。

反省。…ちょっとだけな。

「で？ 結局なにがどうなわけ？」

目の前のテーブルにはたくさんの種類の料理が並んでいた。  
時刻はすでに夕食時。

オレはこの時まで屍と化していたわけだが…  
言い訳をさせてもらいたい。

召喚されたとき、このちから時刻は毎だつた。あらうの世界ではすでに夕方だつたのに。

本来ならもつと早い時間に食事をしていたはずなのだ。

…つまり何が言いたいかといつと。

（腹がへつた！…）

単に空腹で動けなかつたのだ。そういうことにしておいてほしい。  
魔法が使えなかつたからといって、くこんで泣いてたわけじゃないのだ。けつして。

「ん…、この世界は魔王によつて危機に晒されてる、ところは話したよね？」

「おう。で、その魔王を深沢が倒しに行くんだろ？明日行くのか？田帰り？」

話しながら食べるのは行儀が悪いかもしないが、腹へつたし。

（遠慮せずにいただきま～す ）

会話の途中で食事を始めたオレを苦笑しつつ眺め、深沢も食事を始める。

はむはむはむ…　はむはむ…　はむ…

（……あ～……何て言えばいいのか…

…味がしねえ…）

美味しそうな見た目とのギャップのある味（無味だけど）で、オレの口の動きが一瞬止まる。

ちらりと深沢を見れば、普通に美味しそうに食べていた。招かれざる客でありながら、勇者と同等のもてなしをされている。それなのに、口に合いませんとか我が儘は言えないだらつ。表面上は深沢も文句はないようだし…

オレは事なき主義者なのだ。ここは無難に『黙る』を選択しよう。

「魔王討伐はまだ先の話だよ。一緒に行く人たちを選ばなきゃいけないからしー

「そうなんだ？」

意外とゆうくりなんだな、と思つ。元の世界に戻るのはまだ当分先の話つてことのようだ。

「ここの世界には三つの国があって、その三つの国の先に魔族と呼ばれる人達の住む地があるんだつて。そこに魔王はいるみたい。…これからはずいぶんと遠いみたいだから日帰りは難しいと思つ」

苦笑しながら深沢は簡単に説明してくれる。

全部の質問に答えようとすゐとか、やつぱり律儀な性格してゐよな。

律儀といえば、魔王も律儀なんだな。魔族の地？にいふ、とこつことは、そこに留まつていて他の国には行つてないつてことだら？なら別に、世界的な未曾有の危機！？…ってわけじゃなさそうだけど……

なんで魔王討伐とかいう話になつてゐんだら？

「それより。この世界の人達の寿命は魔力量で決まるんだつて。なんとも不思議で理解できないんだけど」

オレの疑問に思つた事をあつさりスルーし、深沢は話題を変える。勇者には心を読むという能力はないらしい。

「なんだよ、ソレ？魔力がいつぱいあると長生きするつてことか？」

「みたい」

なんだかちょっと引っ掛かるが…

「ええ～…。つてことは、魔力あんまりなかつたオレは長生きできないつてこと?」

「ん～、魔力は増やすことが出来るらしいから、そつでもないんじやないかな」

「ほうほう。……増やすつて、どうやつて?」

なんだか質問ばっかりで恥ずかしいな～異世界だし言葉通じない仕方ないのかもだけど…

「睡眠や食事で増やせるつて言つてた」

ウザがらずに答えてくれる深沢には感謝だな。  
オレが深沢の立場だつたら無視か睨むかどっちかだな。絶対。

(オレつてば、ちつさい人間だね～)

ちょっとぐらい深沢を見習つたほうがいいかもしない。

……まあ、それは後でもいいか。

それより今は、魔力増量のためにたくさん食べることにしよう。味しないけど。

魔力が増えれば、もしかしたら従者ポジションもらえるかもしだいし。

…力がなくても魔王討伐には連れてつてもらえるかもしないけど、何もしないで守られてるだけつてのは、男として以前に人としてどうかと思つしな。

で、張りきつて食べた結果。

「……うう……つ……食べすぎた……」

「高崎つて極端な性格してるんだ?」

呆れた顔した深沢に、疑問形で断定された。  
……自分でもやりすぎたな~とは思つから否定できない。  
あほだろオレ。

マジで食べすぎて動くのも難しかったオレは、深沢と給仕をしてくれていた人（女性）数名に部屋まで運ばれてしまった。

……情けなさすぎるぜオレ。

泣いてもいいだらつか……

## 『その選択に世界は歓喜する』

密室にしきせと二人で連れてこられた、しばりベジタブル横になつていたが、ちつとも良くなつた気がしないので、とつあえず部屋の中を歩き回つて消化を促してみる。

(うー……苦しい……)

かなり広いがどうやら一人部屋らしい。  
おかげで誰かに見られるということはない。  
隠れて監視とかは……してないと思いたい。  
だつて、腹押されて前屈みで部屋を徘徊するヤツってビリ見たつて  
変質者だよな……

……つか自分で言つてく」ときた…

てこうか……だんだん気分が悪くなつてゐる気がするんだけど……

お食事中の皿やパンメンなれい。吐いてきてもいいですか……？

「ふう。ちよつとだけすつまつ

前屈みの状態から脱したオレは、やつと意識を外側に向けられた。うになつた。

部屋には明かりがついてなかつたが、窓から入る月の光で仄かに明るいことに今更気づいた。

大きめに造られた窓に寄り、夜空を見上げる。

「…おお~」

そこには見慣れたものよりも大きな月があった。

「どうりで明るいはずだな」

包み込むような柔らかな光の幻想的ともいえる景色に、感嘆のため息をつく。

「…まあ…」

ふいに、目からも何か出そうになつたが、そこは耐える。

「吐いちゃつたし、魔力増量はしないよな~?  
寝ればちょっとは増えるか…?」

魔力の量によつて寿命の長さが決まる。

どういう原理なのかはわからないけれど、それは健康状態にも影響があるんじゃないだろうか。

ずっと気にしないよにしてきたけど、この世界に来てから少しすつ体調が悪くなつてきてる。

「つーか、どうこう仕組みで増えてるんだ?睡眠や食事って、イメージからすると増量より回復な気がするけど……」

自分は魔力の量が少ない。

金髪美少女や他の見知らぬ人たちすべてから同情される程に。  
その意味を考えると怖い結論が出そうで、わざとズレたことを声に出して言つてみる。

「それは体力の話か……うん…体力と魔力の違いがわかんな  
くなってきた。明日聞いてみるかな?深沢わかるかな……?」

もし、このまま魔力が増えなかつたら…

「言葉がわかれば他の人に聞けるんだけど…わかんないんだし…  
仕方ないか…ないよな…」

言葉つて大事だなど、ここにきてやつと思い知る。  
だいたいのことはジェスチャーでも伝わるけれど、気持ちを伝える  
にはそれだけじゃ足りない。

「…よし。とりあえず、寝るか!」

考えたつて解決策が出るわけじゃない。

(もしかしたら、明日になつたら解決策があつたり見つかるかもし  
れないし?)

我ながら楽観的な考えだな~とは思うけど…  
せつかくの異世界ライフだし楽しまないとな~!

そうと決まれば、  
おやすみなさいっ

## その選択に世界は歓喜する《6》

気がついたら何だかよくわからない場所にいた。

確かに自分はベッドに寝たはずなのに、ベッドは見当たらぬし何故か立つてゐるし…

ベッドどころか、月明かりで確認した家具や、そもそも部屋すらもなかつた。

モヤがかかっているのか…視界を遮るものはないはずなのに、辺り一面確かに形として捉えられるものは何一つなかつた。

自分が立つている場所も床なのかはつきりしない。

自分では立つてゐるつもりなのだが、踏み締めている感触がない。浮遊感もないで浮いているわけでもなさそつ。

「? ? ? ? ?

頭の中が?マークでいつぱいになる。

「はじめまして。ゼン」

いつの間にか目の前にいた人物が声をかけてくる。

そんなに遠くにいるわけじゃないのに、どうしてもその人物の顔がわからない。

見えてるはずなのに。

（……なんだろ？……）のあやふやな感じ……まるで夢の中こころみたい  
な……）

……なんだ、そうか。これって夢なのか。と気が付いたオレは挨拶を返  
す。

「はじめまして。……えーっと……？」

残念なことに相手の名前がわからない。夢の中なんだからわかつて  
てもいいはずなのに……

「夢の中ではないよ。」これはキミの深層心裡。……まあ同じようなも  
のかもしれないけど、「

顔は相変わらずわからないのに、相手が微笑ったことがわかる。

「現実世界では僕はキミに声を届けることが出来ないから、キミの  
精神にこづして繋げさせてもらつた。本来ならこの接触もあつては  
ならないものなのだけど……非常事態のため、仕方ないと判断をせて  
もらつたんだ」

んだ。と、言われても……

何が何やらわからんんだけど？

「キミにひとつては夢でしかないかもしれない。けれど、これは現実  
のものとして考えて欲しい。僕が今から説明することは紛れも無い  
事実なのだと理解して欲しい」

「…………わかった」

何を言われるのかよくわからなかつたが、相手が真剣なのだと「こと」はわかつた。

「結果から言つよ。ゼン、もつすベキミは死ぬ」

は？

何て言つた今。いやいや怖いこと言つね初対面なのに。

「氣づいてるんだもつへ自分がこの世界で長くは生きていけないかもしないこと」

は？フツー氣づかないだろ？そんな事。つーか、思わないって。ただオレは、身体の調子がおかしいなって思つてただけで…確かに寝る前は変なこと考えそつになつたけど、具合が悪いときつて誰でもネガティブ思考になるだろ？

「ゼン。この世界は理によつて、魔力の量が寿命の長さと決められている。

けれど…キミは体がこの世界に適応できていないために、世界から供給される魔力を吸収し自分の物とすることが出来ないでいる。持つている魔力が少ないキミではそつ長く生きられないんだ」

なんだもつ…すく怖いこと言われちゃつてる氣がするんですけど。それを理解しようと？

「……なんで？」

ああ情けない。もつと大きな声出せよ。怒鳴れよ。喚けよ。それが本当に真実なのかと問い合わせよ。

でも知つてゐる。ずっとこの世界はオレによそよそしかつたこと。  
まるでフルスクリーンの映画を観てゐるよつに…自分の回りに透明な壁があるかのよつ。

……ずっとこの世界は遠かつた。

「…帰れるんだろ?」

オレはこの世界に歓迎されていないつで、ずっと氣づかないふりをしてた。だつていつかは帰るんだ。だつたら今いふこの世界はオレにとつては夢でしかなくて、この世界に馴染めないことなんて当たり前だと思つてた。

「勇者召喚は最初から最後まで決められているんだ。異世界の住人を喚び必要な力を与え役割が済めば元の時間と場所に還す。これは理として定められ、誰にも介入することは出来ない。…キミが巻き込まれたのは不運だとしか言えない…」

……それつてつまり?

「帰れないつて…ことか?」

「来るときには近くにいて巻き込まれたのなら、帰るととも近くにいればあることは。…けれど、キミは多分その時まで生きる」とは出来ない

とても辛そうに、目の前的人物が言つ。身内や親しい友人に告げるかのよつ。その、最終宣告を。

ぐちゃぐちゃになつてたオレの心は、それだけでスッと戻いだ。

「……そつか……」

不思議な感覚。絶対に今が初対面なのに、オレとは全然無関係の人のはずなのに、それなのに、オレのことを想つてくれている。オレの心を気遣つてくれている。

それがなんだか嬉しくて、もうにいや、という気分になつた。死ぬのはイヤだけど（しかも異世界で）、でも人生の最後に、こうやって真剣にオレを気遣つてくれる人に出逢えたつていうのは、すぐ幸せなことかもしない。

「そつか。うん、わかつた。教えてくれて有り難う」

「……ゼン」

目の前の人物が泣きそうな気配がしてオレは慌てる。

「いやつ……だつてさー……だつて……誰のせいでもないだろ？仕方ないつていうかわ……まあ落ち着いた気分になれただけマシかな」とか思つし

へらつと、相手に笑つてみせる。緊張感ないなつて我ながら思つけど。

だつて本当にいいやつて思つたし、嬉しかつたし、なんだか気分いいし。

「ゼン……。もし、キリさえよければ、この世界で生きる……という選択もできる」

「……は？」

「いや、だから、キミが選ばれた世界で生きてこようとも出来……」「早く言えよやつこいつと一緒に……えつ……すまない」

死ぬ覚悟決めたとこだったのに……いつ、突き落としてから引き上げるタイプだったのかつ

「キミがこの世界の住人になることを受け入れれば、世界もキミを受け入れる。当然魔力も受け入れることが出来るようになるから、この世界で生きていく。けれど……キミのいた世界でキミの生きた証は消滅する。誰の記憶にも痕跡は残らず、最初からなかつたものとされる。それでも……」

相手の戸惑いの感情が伝わっていく。

「こちらの世界を選んで欲しい。けれど選んでくれなかつたらどうしよう」

そんなふうに思つてゐる。

目の前にいる人物は、間違になくオレに生きててほしこと思つてゐる。

(「わやばい。めちゃくちゃ嬉しい」)

生きることを、幸せであることを、願つてくれる人がいる。それが、顔がニヤけるほどに嬉しい。

だから。

「オレはこの世界を選ぶ」

オレの言葉に、相手は驚いたよつだ。  
しばらく固まつた後、とても嬉しそうに笑つ。（見えないからセリフ  
いつ氣がするだけだけど）

「有り難ひ、ゼン」

…その台詞はオレのほつだと思つけど?  
まあいいか。嬉しそうだし。オレも嬉しいし。

とか思つてたら、急に意識が遠くなる。  
それでも、声は耳に届く。

「ゼン。世界はキハを歓迎するよ。加護と祝福を送りひ。キハの道  
行に幸降るよつて」

その言葉と同時に、体が暖かな気配に包まれたよつな氣がした。

あ、今前…聞きましたな～

## その選択に世界は歓喜する《二》

ふつ、と意識が浮上する。

目を開けるとそこは自分に下された部屋だった。

夢……

「……じゃなーいっー」

ガバッと勢いつけて起き上がる。

寝る前まで感じていた倦怠感がなくなっている。

起き上がった勢いのまま、窓に駆け寄り、鍵を開けるのももどかしく開け放つ。

ふわり、と朝の空気が頬を撫でる。

昨日までよそよそしかった世界が、とても近くに感じた。

柔らかな朝の光も、鳥たちの鳴き声も、葉を揺らす風も、見えるものすべてが輝いているかのよし。

「キレーだなーーー」

昨日までは、ただ観賞物として美しいとしか思えなかつた景色が、今は感動と共に胸に染み込む。

「オレは今ものすつじぐ感動してーーーみんな有り難うーーー今日からよろしくーーー」

あまりに気分が良かつたので、バカみたいに叫びたくなつた。

まだ早朝っぽいし聞いてる人なんていないよな？

……いたら恥ずかしい。

誰かに向かつてならまだしも、一人で叫ぶとか怪し過ぎる。何してたんだとか聞かれたら何て答えよ？

素直に世界に感謝を捧げてましたって言つか？

（……歴じや満点だな。やつぱ止めよ。）

てこつかオレ言葉わかんねーじやん。

「……いややつぱ止めよ。深沢が聞いて……」

独り言をぶつぶつ呟いていたら、外から何やら音が……

「……ふわわっー？」

何かに突進された。……ひづきひづきの鳴の声だ。

「な……っんで……こんなにいっぱい……ぶつ……ひよつ……待つ……」

わけがわからないが……何故かかなりの数の鳥たちが纏わり付いてくる。

もしかしたら餌をくれる人と間違えたのかもしれない。

「餌なんて持つてねーよつ……つて聞けお前らーつ！」

なおも纏わり付いてくる鳥たちを空に帰そうとするが、まったく聞いてもらえない。

そんなこんなで怒鳴つていると、扉をノックする音が聞こえた。

次いで少し慌てた様子の声がする。

…すみません。言葉がわかりません。

相手のまつもそれに戻りこたのか、口から応答を待たず扉が開かれる。

そして中の様子…とこつよりオレの様子に戻りき慌てて近づいてくる。

それを見た?のか鳥たちは一斉に飛び立つてこつた。

(「…、朝っぱらから疲れた…せつかくのこの世界デビューの初日だったのに…」)

「―――――?」

長い金髪を一つに分け、せつちつ三編みにしたメイドちゃん(たぶん)に覗き込まれて、オレは慌てて起き上がる。  
言葉はどうせ通じないので、笑つてしまかす。

「――――」

メイドちゃんは自分のやるべりとを思つて出したのか、頭を深く下げて何かを言う。

たぶん朝の挨拶だろ?。

この世界で生きていいくと決めたのだから、自分もこの世界の言葉を覚えなければいけない。

と、いふことで早速。

メイドちゃんが言つた朝の挨拶っぽい言葉を真似してみる。  
発音が怪しいのは「愛嬌」とこつことで流してほし。

それを聞いたメイドちゃんは思わずとこつた風に身体を起してオレを見る。

(お~通じた??)

もしかしたら通じてなかつたかもしけないけど、メイドさんのその反応が嬉しくて笑つたら、つられてメイドさんも笑つてくれた。

(お~う可愛いな~)

笑顔のまま、メイドさんは衣類と水の入つた丸い入れ物を指し示す。

(着替えて顔洗えつてことかな?)

鳥に纏わり付かれたせいで、こつちの世界に来てからずっと着ていた制服はかなり汚れたので、有り難く衣服を借りることにする。

(いひいう着方でいいのかな?)

布をたつぱり使つた服は足首をすっぽり隠すほどに長く、ローブのようによ下が繋がつていて、どうやらヒモを腰で縛つて長さを調節するみたいだつた。

(踏んで転ぶとか避けたいしな。ちよつと短めにしどくか)

後でお礼をしつかりしよつと心に誓つ。

もう自分は異世界から来たお密さんではないのだ。受けた恩はちゃんと返さなくては、この世界で生きていくための人間関係を築くのが難しくなるだろつ。

着替えるのを扉の外で待つていてくれたメイドさんに、扉を開けて着替えたことを知らせる。

メイドさんは着替えたオレを見て微笑んでくれた。

（うわ～）のメイドさんの笑顔和むな～。やっぱ人間関係には笑顔  
が大事だよな～）

そんなことを思いながら、どこかへ案内しようとするメイドさんに  
ついて歩く。

（ああ～）の世界へのデビュー第一日田～  
頑張るぞーっ！～）

決意も新たに張り切るオレに、どこからか吹く風が優しく過ぎる。  
それがこの世界からの祝福のようで、思わず笑みが零れた。

異世界の勇者、いじらせるため息（前書き）

ユイカ視点

## 異世界の勇者、じらへるため息

気がついたら、異世界でした。

は？

……つて言いたい。

本気で頭大丈夫？つて聞きたい。

だって私、今の今まで学校にいたんだよ？

特別ではない、日本の、本当に普通の高校だよ？

でも、異世界だと主張する彼らは嘘を言つているような感じではないし、というより日本人に見えないし。

日本語ではない言葉を話してゐし、なぜか自分はその言葉がわかるし話せるし。

どう見たつてこの場所は日本ではないし。だって島が浮いてる場所なんて、日本にはないでしょ？

だから、うふ。 じるは異世界なんだと思ひ。

「じるは貴女方の世界ではあつません」

やたら長い金髪の少女が繰り返し教えてくれる。

……実は異世界という意味がよくわかつてなかつたりするんだけど

……つまり地球ではないってことだよね？

そこまではとりあえずわかつたから、私と同じように困惑している（である「つ）クラスメートにそれを伝える。彼は私と違つて、異世界を主張する人たちの言葉がわからないらしい。

「…く～え」

と、返答された。一応自分なりに、わかりやすく通訳してみたのだけれど……伝わったのかな？

異世界だというのを理解したのかはわからないけれど、自分がただ巻き込まれただけだというのは理解したらしく、かなり落ち込んでいた。

「高崎…大丈夫？」

私が巻き込んだわけではないけど、なんだか申し訳ない……。

…と、思つていたら、いきなり彼は、

「せめて従者ポジションを…」

と叫んだ。

……本当にわかつてゐるのかな…？

従者ポジションって発想がどこからきたのか気になるけど…なんだか高崎、遊園地か何かのアトラクションと勘違いしてない？

高崎の言葉を金髪少女に通訳すると、少し考えた後、

「まずは部屋を移動しましょ！」

と言ひ、別の部屋へと案内される。

…石だけで出来てる部屋つて初めて見たけど、どうやって崩れないようにしているのか不思議…。

「では、現段階でのお二人の力がどの程度なのかを調べさせていただきます」

やつひ面つて金髪少女は細長いものを両手で差し出してきた。

「こちらの剣を使ってみてください。お相手はこの者がいたします

金髪少女から示された男性は綺麗に頭を下げ挨拶をした。  
…つまり剣を使ってこの男の人と試合をしろってこと？

（剣なんて使つたことないんだけど……）

とか思つていたけれど。

やつひみたら意外に楽勝だった。

…楽勝すぎつまらない。

なんて、口にしたら嫌味に聞こえるかもしねないことを思いながら、ギヤラリーと化していた高崎に剣を渡す。

「わわわわー」

渡した途端、高崎が剣を落とした。

渡し方がいけなかつたのかと思って謝ろうとしたら、どうも単に重くて落としただけのよつ。

……重い？

私にはとても軽く感じたのだけれど……

そういうえば私には勇者補正の力が働いて、普通の人より遙かに高い能力が与えられるとか言つていていたかもしれない。勇者補正が何かよくわからないけれども。

……でも金髪少女も普通に持つていたよつな……？

「「」めん。高崎」

とりあえず謝つておいた。

ここでもまた落ち込んでしまつた高崎は、またしても、よくわからぬ理論で発想する。

「あるんだろう？魔法」

……魔法？なんで落ち込んだ結果が魔法に繋がるの？

といふか、この世界つて魔法があるの？

「あります」

金髪少女に聞いたらあつたり肯定された。

……あるんだ。

金髪少女が今度取り出したのは小さな箱のよつたものだつた。

「これは魔力を測定するものです。魔力が多い程、強力な魔法が使えますし、寿命が長くなります」

金髪少女はあつさつと言つ。

「なんで寿命が長くなるのかつて突つ込んでいいのかな…？」

手をかざせと言つので、かざしてみる。

一瞬の後のホワイトアウト。

（田…田が痛い…）

高崎にも言つてやつてもらつたけど、田が正常に戻らなくてよく見えなかつた。

後で周りの人を見回してみたら、なぜか同情の眼差しで高崎を見ていた。

……なんで？

その後、魔法の使い方や私がやるべき事などの情報を与えられた。実践したわけではないのに、言葉で教えられただけで理解する自分に、

（ああ、これが勇者補正か…）

と、納得する。

それに対する驚きはなかった。むしろ、驚かなかつたことに驚いた。なんとなく理解した、というのではなく、確信を持って断言できる。魔法が使えるだらう、ではなく、当然のようだに魔法は使える。使つたこともないのに、事実としてそう思つ。そう思つことが勇者補正。理解力の有り得ない程の上昇。

それは、とてもつまらないと思つ。

基本的に私は、出来るか出来ないかわからないものに挑戦していくのが好き。

何の苦もなく片手間で出来てしまつ状況は、非常に面白くない。

高崎はどう思つてゐるのかな？

言葉がわからないのなら、私よりも退屈しているかもしない。実際、夕食の時間までぼんやりしていたし。

豪華な食事を前にしたら元気になつたみたいだけど。

ついでに食事をすれば魔力が増えるといつことを教えた後、やたら食べて撃沈した。

本人はいたつて真面目なのだろうけど……その極端さに笑つてしまつた。

よつぽど魔力が少ないと氣にしてたんだ……まああれだけ周りに同情されまくられていたら氣にもなるか……。

自力では動けそうもなかつた高崎を支えて部屋まで送つてから、自分に与えられた部屋へ行く。

ちなみに高崎はちつとも重く感じなかつた。これも勇者補正らしい。一応、か弱い乙女に分類される性別の自分としては、……けつこう落ち込んだ。

部屋の窓から外を眺める。

自分が知ってるものより大きな月が見えた。

（やつぱりここは地球じゃないんだな…）

わかつている事を、あえて思つてみる。

私は勇者で魔王を倒すのなんて楽勝で、それさえ済めば元いた場所と時間に戻れる。その際、こちらでの記憶は消えるので心配いらない。

……なんていきなり言われて納得する人なんていないと思う。理解は出来ても納得は出来ない。

そう、それこそ

「…く～え」

としか言えない。

高崎もこんな気分だつたのかな？

別に相手は押し付けてるつもりはないんだろう。こちらのことを気遣かつてくれてることはわかる。

…でもこちらの意見は聞かない。

否定されてるわけではないようだけど…

自分の存在なんてないかのようだ、置き去りにされたかのような気分。

きっと私が何もしなくても、ストーリーは当たり前のよう進んでいくんだろう。

私はただそれを見るだけ。

「ラストの決まり切る映画のように…誰かの夢を無理やり見せられて  
るかのように。」  
ストーリーに手を加えることは許されず、ただ眺めるだけ…

「…せめて、もう少し…」

楽しい夢ならよかつたのに。」

## 掴め！？幸運の「ツキ キーハック」

爽やかな朝の空気を満喫しながら、オレは食堂つぽいとく足取りも軽くやつてきた。（メイドさんは入口で別れた）朝食のいい匂いがしてきて腹が鳴りそうだ。

テーブルの適当な所へ座ると、深沢が室内に入つてくるのが見えたので声をかける。

「はよー」

「…おはよー、高崎」

あれ？なんだか深沢、ちょっと不機嫌っぽい。

「フロにでも入つてきたのか？頭、濡れてる

『気づかないふりで話しかけてみる。

「頭じやなくて、髪でしょ？」

苦笑しながら深沢は答える。……『氣のせいだつたかな？

「朝練して汚れたから、少し浴びてきたの」

そう言いつつ、深沢は濡れた髪を一撫である。それだけで濡れた髪はさらりと乾いた。

魔法かな？

(「いーなーオレも魔法使えるようになるかな?」)

こちらの世界の住人になつたのだから、魔力は増えていく……はず。  
魔法も使えるようになるはずだけど……

（どうか魔法の使い方知らないけど。  
今、深沢なにも言わなかつたよな？）

……いや、魔法の使い方よりも先に言葉を覚えよう。  
深沢がいなくなつたら、誰にも通訳してもらえないのだから。

「高崎は今日せんじゅくゐる。」

テーブルに並べられていく豪勢な食事を見つつ、深沢が問い合わせる。

「どうして…ん~どうするかな~。深沢は?」

いやしかし、こんなに朝からたくさん食べるのか？

食べるのもちろん。

だつて昨日は全部吐いちゃつたしな

さて、今日は味はあるのかな？

100

( ねねねね う かや こ う う す が 一 す が 一 う ま こ 一 )

昨日の食事とあまりにも違う味に感動を覚える。

これはこの世界に受け入れてもらえた証拠なのだろうか?  
…よくわからんが、そういうことにしてもいい。

「私は、今日は魔王退治と一緒に行く人たちを決める大会があるから…それを見に行く」

「大会?…運動会みたいなもんか?」

「高崎も見に行く?」

あまり乗り気じゃない様子で深沢が聞いてくる。

「大会つて何をするんだ?」

「さあ?確かに、何かを探す…宝探し?みたいなのがったよ?」

…ホントに興味ないんだな、深沢。

「それつてオレも参加できる?」

「高崎は最初からメンバーだよ?別に参加しなくても…」

「ん~…オレが魔王退治?

別についていくメリットなんてないと思つけど…  
そんなことより、こちらの世界に早く馴染みたい。

「魔王退治はオレ不参加つてことで…今日の大会とかは何かおもしろそうかもだし参加してみたい」

「こうより、こちらの世界の人たちと無理やりにでも交流して言葉を少しでも覚えたい。」

「おもしろそう…かも？」

「どんなのかわからんないんだし。かも、だろ？」

オレがそう言つと、深沢はなにやら考え込みはじめた。

「ていうか。選ぶ基準ってなに？ 深沢が選ぶんだろ？」

「そう言つたとたん、深沢は明らかに目線を逸らした。やはり不機嫌なようだ。」

「選ぶのは私じゃない。金髪少女たちが、何かを探して持つてこれた人の中から選ぶらしい」

…深沢、あの金髪美少女の名前知らないのか？（オレも知らないけど）

「…それってさ、なんか嫌じゃない？一緒に行くのは深沢なんだろ？ だったら深沢が気に入るヤツ選んだほうが楽しいんじゃね？」

オレだったら嫌だ。それって堂々と監視をつけられてるみたいで。まあ金髪美少女は人が良さそだからそんなつもりはないんだろうけど。

「私が選ぶといつても…どうこう人たちを選べばいいのかわからなーいし…」

まあ確かに…

それを理由に選ばせてはもらえないかもしねない。

でも多分、今日の大会は参加資格とかあるだろ？。まつたく使えないやつが参加してるのはないだろ？。

とこうか、たとえ素人でも、深沢がいれば何の問題もないと思つけど……

だってチートな勇者だし。

「そんなの深く考へるなよ。深沢が一緒にいて楽しめそなやつを探せばいいだろ？」

「……うん」

深沢が消極的に頷く。

「うせ選んでも却下されると思つてるのかもしねない。

「何人選ばれる予定なんだ？その人数だけ深沢が選んで、それ以外は脱落させればいいだろ？」

「…脱落させる？」

「そう。『ゴールしないように妨害すれば？深沢なら出来るだろ。せつかくの能力なんだから使わないと損だぜ？』

なにも真つ当にやる必要なんてない。邪魔をすればいい。『ゴールにたどり着かないように。』

自分の選んだやつだけが、そこへ辿り着けるように工作すればいい。……というようなことを深沢が思つたのかは確かじやないけど、その瞳に強い想いが宿る。

「バレたら一緒に謝つてくれる？』

いたずらを仕掛ける前の楽しそうな笑顔で深沢が聞いてくる。  
その顔を見るかぎり、バрезにやる自信があるようだ。  
だからオレも同じように笑つて答える。

「バレなきゃいいんだろ？」

おお、なんか楽しくなってきたな！

何を探すのかはわかんないけど、いろんな人とたくさん交流できた  
らしいな。

## 掴め！？幸運の「チ キーヒック」<sup>△△</sup>

「おお～」

集合場所になつていていたりして外の広場に行くと、大勢の人が集まつていた。

おそらくここにいる全員が、今日のイベントに参加するのだ。ほとんどが男ばかりで、女性は数える程しかいない。

（女の人は魔王退治には行きたがらないってことか？）

そんなことを思いながら見回していたら、深沢が走り寄つて来るのに気がついた。

「高崎！」

深沢がオレの名前を呼んだとたん、回りからたくさんの視線が突き刺さつた。

（…………なにかなコレは？）

まさか…深沢、変なフラグ立てたんじゃないだろうな？

まわりはともかく、深沢は普通に今日のイベントの詳細を説明してくれる。

要約すると、

近くの森にある何か（興味がなかつたので宝物？の詳細は聞き流し

た)を持つてスタート地点まで戻つてくること。持つてなくても夕方までには戻ること。指定の時間までに戻れなければ、どんな理由があらうと失格となること。

そして何と…森の中にまた「ラップ」が仕掛けである…らしい。

(…もしかしたら思つたより危険…?)

「私と高崎はそんなこと関係なく田舎に参加していって言われたけど…ラップが多いらしくて、高崎にはキツイかも…」

ビーブラム…と聞かれてオレは速攻返事をする。

「参加するに決まつてんじやん?」

いくら危険つていつたつて、またか命の危険つてほどでもないだろう。多分。

(なんとかなるなる…)

ただチートな勇者様になつていてける自信がなかつたので、深沢には別行動をお願いした。

「で?どうやつて選ぶんだ?」

巻き込まれたら堪らないので、深沢の行動を一応把握して置こうと思つて聞くと、深沢はにやりと笑つた。

「もう選んだよ。あとは他の人に、指定の時間を過ぎてからゴールしてくられるよつてお願いするだけ」

『お願い』が何を意味するのかは、あえて聞かないでおいた。というより、その顔は勇者がしていい表情ではないと思つ。

そこまで話しあると、ちゅうビスタートの合図が響き渡つた。その場にいた参加者の皆さんはなぜかオレを睨んでから森のほうへ駆け出して行く。  
もしかしてライバル認定されたとかだらうか?……いや、ないな。だつてオレは金髪少女より遙かに弱いんだぜ?……自分で言つて泣けてくる事実だが。

(まあとつあえず、森に行つてみますかね?)

なんだか地元の人たちと交流とかつて無理そうな雰囲気なのだけど……と思いながら、深沢と分かれて森に入る。

.....

はい、ここで質問です。

なぜにオレはいつもおじ様方に追い掛けられているのでしょうか?

(なんでつー? オレより先に森に入つたはずの人達が後ろから来るんだよつ?)

まあ、普通に考えれば待ち伏せをされていたのだらうけれど…

(もしかしてアレか?!)この大会つてサバイバルなのか!)

一番弱そうなオレから潰そうという狙いなのかもしれない。

「オレ参加者じゃねーし…オレ潰しても意味ないですよー」

…なんて言つても通じるわけないのだけど。

後ろのおじ様方の言葉ももちろんわからないのだが、聞いてるつちにある単語が頻繁に出でてることに『気がついた。

「――コイ――」

(…コイ? なんだから名前っぽい?)

…………

あつ! わかった! !

深沢のことか!

たしかあいつの名前がそんなんだつたはず。

(なんで深沢の名前連呼しながらオレを追つてくるんだ?)

よくわからないが、あまり友好的な雰囲気ではなさそうなので全力で逃げることにする。

ただまつすぐ走つてもすぐに追いつかれそうだったので、右に左に不規則に走り森の木々を利用し撒く。

時々後ろから聞こえる悲鳴を無視してひたすら走つたら、いつの間にかおじ様方はいなくなつっていた。

(トライップに掛かったのか? … ラッキーだけど…)

ぐるりと四方を見回す。

深い森の中。ビルを見ても木ばかりだ。繁る枝葉に空も見えない。

(…………もしかして、迷った…?)

冷や汗が流れる。

うわ。  
うわ～  
…

マジかよ?

詰め！？幸運のラッキー・ヒッグ《×3》

迷子の鉄則は、迷つたと気づいた時点でその場を動かないこと。  
……なんだけど。

(じゅみゆ既に迷つてゐるなり、わざと動き回つても一緒だよな?)

そう思い、明るそうな方向へ歩きだす。  
少ししたら開けた場所に出た。小さな花が咲き乱れる花園のような  
場所だ。

見上げると鳥の群れがゆごくり飛んでいるのが見えたので、オレは餌を取り出す。朝、大会に参加する前にメイドさんに頼んで分けてもらつたのだ。

「お~い。朝は『メンなー? 餌も~りつてきたぞー

空に向かって声を上げると、それが聞こえたのか鳥たちが降下してきた。

「ハフ――ニニ」

朝と同じく、勢いをつけてたかられたので花畠に倒れ込んでしまう。

そんなことお構いなしな鳥の大群にたかれていると、少し離れた場所から小さく笑う声が聞こえた。

それを聴いたからか、鳥たちは慌てて空へ帰つていく。

（つ、疲れた…）

主に精神的に。

餌が回りに散らばつているのを見て更にげんなりする。…餌を食べずに散らかして、なにがしたかったのかあの鳥たちは…。

「-----」

何かを語りかける声の方向に、仰向けに倒れ込んだまま田線を向けると、やたら整つた顔立ちの男の人がいた。

（異世界トリップのパターンで言つと、ここで登場するのは王族なんだけど…）

…なんて、バカなことを考えてしまつた。

だいたい勇者は深沢でオレはただのおまけなんだからそんなパターンにははまらないだろう。

…とはいへ。貴族的といつか…上流階級の人間であるような印象を受ける。（こちらの世界の身分制度がどんなものかがわからないが。）

やたら姿勢が良く、服はシンプルだが品がいい。

ちょっと瘦せているが、騎士といつのはこんなかんじなのかもしれない。

遠くて眼の色はわからないが、長く伸ばされ背中で括られた髪は自分と同じ黒色だ。

その男の人は、何かを言いながら、空を指したりオレを指したりす

る。

(…いや、オレを指してんじゃなくて? 餌、か?)

餌を指して空を指して首を振る。

(あつーわかつた! これ、鳥の餌じゃないんだ! )

……じゃあ、何の餌なんだ?

メイドちゃんに通じたと思ったのは勘違いだつたのか…。がっくりだ。

オレが理解したことに気づいたらしく、その男の人（言ひにくいな…）仮にお兄さんと呼ぼう）はオレの向いづ側を指差す。

そこには小ちな白い鬼（のよくな動物）がいて、こちらを向ついた。

(鬼っぽいけど…鬼よつしつぽが長いな~)

なんて思いつつ。お兄さんを振り返ると、またしてもお兄さんは餌を指差す。

(…! れを食べさせひとことかな?)

そう思い、クッキーのような餌をひとつ取つて鬼の意識を引き寄せよつと寝転がつたまま腕だけを振る。（さすがに立ち上がつたら逃げられるだらうから。）

意識が餌に行つたのを確認してから餌を放る。それは鬼の少し手前でぼとりと落ちた。

慎重に慎重ににじり寄つて、オレが動かないのを確かめてから餌にかぶりつく。

(か、可愛いすきるー。)

あまりの可愛いことにまにまするオレに、早くも食べ終わった兎は次を催促するようにじっと見つめる。

何度か同じことをしつつ距離を短くして、とうとう兎は手の届く位置まで近づいてきた。

試しに餌を持ったままの手を兎に近づけると、兎はそのまま餌」と抱き着いて食べた。どうやらオレに慣れたらしい。

可愛いすぎるやつめ。

オレが何もしないのに氣づいたからか、腹の上に飛び乗つて、そこにこぼれていた餌を食べはじめる。

そのときになつて初めて、お兄さんはオレに近づいてきた。兎を驚かさないようじっと待つてくれたらしい。いい人だ。

「――――

すぐ側まで来たお兄さんは何かを言いながらひざまづいた。近くで見るお兄さんの顔はやはり美形だ。

瞳の色は深い青。切れ長で全体的に冷たい印象を受ける。

「――――ビッグ

お兄さんが兎を指差しながら言った。

(ビッグ?)

何度も聞き返してもお兄さんは兎のことをビッグと言つ。名前だらうか…?

いや、しかし。

(「とにかく小さこのにビッグだなんて」)

多分といつか絶対いからではその意味じゃないのだらけだ。つこ  
そつ思つてしまひ。

「よしーお前の呪文はビッグなー。」

略しただけだが、自分的にはビッグよりは違和感がなくて「可愛い」と  
思つ。

兎は自分のことを言われたのを理解したのか、「グウ」と鳴いた。  
なんだその鳴き声。可愛いすぎるだろ。

お兄さんも可愛いと思つてくれたのか、何かを言つてふわりと笑つ  
た。

冷たい人かと思つたけど、笑うと柔らかい印象で優しそうだ。

(美形はどんな表情でも様になるつてホントなんだなー)

なんて思つてたら、お兄さんが長々と何かを言つ。視線が合わない  
のでオレに言つてるわけではなたしが…

(もしかしてこれ呪文? 何か魔法を使おうとしてる?… でも深沢が  
魔法を使つたときには何も呪文らしきものはなかつたけど…)

少し不安になりながらお兄さんを見ていると、呪文を言い終えたお  
兄さんがそれに気づき、安心させるかのように小さく微笑んでくれ  
た。

（静かに笑う人だな）

その笑顔が近づく。

何をするのかと不思議に思い、何気なく眺めていると……

で「チュー」をされてしました。

は？ なんで？

……何か魔法を使われるのかと思つてちょっとビビった自分を叱り付けたい気分だな。

## 掴め！？幸運のラッシュキーピング『4』

で「チュー」をされてしまいました。  
で「チュー」をされてしまいました。  
で「チュー」をされてしまいました。

いやいやいや。

なんで？

この世界では挨拶なのだろうか？

「同性に口づけられるのは不快か？…すまない。祝福の魔法を使うにはそれが一番効果が出やすいのだ」

少しだけ申し訳なさそうな表情をしてお兄さんが言つ。あんまり大きく表情を変える人じゃないんだなー、と思つ。

(…いや、そうじゃなくて。)

「言葉がわかる…」

しつつ言つた自分の言葉に違和感を覚える。

…今自分は何語を話した？

「祝福の魔法をかけさせてもらつた。勇者がこのひの世界に来たときには、すぐに言葉を理解しただろう？」

それと同じものらしい。

わざわざかけに来ててくれたのだろうか？

「ありがとうございますー！」

勢いよく起き上がったたら、腹の上に乗つたままだつたビィが転がつていつた。

「わあつー、」メンツー、ビィ

ビィはグウと不満の声を上げたが、膝の上によじ登つて許してくれた。

本氣で懐かれたみたいだ。

お詫びに餌を拾つてビィに「えつり、お兄さんの話を聞く。

お兄さんいわく、祝福の魔法はかけられたほうの意識に強く左右されるもので、いぐらお兄さんが魔法をかけて（しかもそれが成功したとして）も、オレに言葉を覚える気がなければ効果はあまりないらしい。

逆に言えば、覚える気があればあるほど理解するのが早いらしい。

「それだけ君が頑張つたという証拠だ。かけられてすぐに効果が出るなんて珍しい」

これは褒められてる…のかな？

なんだか恥ずかしいといつか嬉しいといつか…

あれ？でも夢の中ではつたあの人からも祝福の魔法をかけてもらつた気がするけど…

「祝福の魔法って言葉がわかるようになる魔法なんですか？」

オレの多分初步的な質問に嫌そつたそぶりも見せず、お兄さんは丁寧に教えてくれる。

「いや、そつとは限らない。今回は私が言葉の疎通を願つたためにその結果になつた」

そつなのか…

だとしたら、夢の中のあの人は何を願つたんだろうか？

「…やはり。誰かに祝福の魔法をかけてもらつたのか？」

やはり？

疑問形なのに断定とは…何かそつするだけの結果が目に見えているのだろうか？

考へてもわからぬので、夢の中であつたことをお兄さんに話してみる。

「世界に祝福をもらつたのか。どうりで…  
一日持ちそうにもなかつた君が今日はとても元気だから何故なのか  
と思つていた」

世界？スケールでかいな。

お兄さんはあつさり言つたけど、それって普通のことなのか？  
つていうか。

……オレって一日持ちそつともなかつたのか。  
だから金髪美少女たちが同情してたのか…

（やうとうやバかつたんだな…）

祝福と加護をもらえたから生きてるってことかな？）

「やうか…。この世界の住人になつたのだな」

しみじみとお兄さんが呟く。その顔は少し嬉しそうだ。

（喜ばれてるのかな？だつたら嬉しいな～）

「これからどうするのかは…もつ決めてこるのか？」

オレの横に座り込みながらお兄さんが聞いてくる。

その言葉に、少し考えたくて視線をビィに戻す。ビィは満腹になつたからか、膝の上で丸まつて寝ていた。

「…とりあえず、働けるところを探そうと思つてます。できればいろんな所を見て回りたいので、移動しながら働けるような仕事があれば理想的なんですけど…」

せつかくだから世界を見て回りたいのだが…なにほともあれ、お金がなくては話にならない。

ゲームでいうところの冒険者ギルドとかあればマジで理想的なのが。

まあそれがなくても、お兄さんが言葉をわかるようにしててくれたおかげで、選べる職種が増えたのでなんとかなるかもしねい。

「それだつたら…」

と言つお兄さんの話を聞くと、この世界にも冒険者ギルドらしきものがあるらしい。ラッキーだ。

討伐系のは出来そうもないが（剣も魔法も使えないの）街の中での依頼を受けて地道に稼げばなんとか生活出来そうだ。

「ありがとうございます！…これだつたら何とかやつていけそうです。早速ギルドに登録してみます！」

「最初は大手のギルドに登録するといい。」

そう言いながら、お兄さんはベルトについた小物入れっぽいところから梨っぽいものを取り出した。

……ん？

なんだか大きさがおかしいけど？

そんな小さな場所から手の平大のものが出てくるのがおかしいだろ？

（魔法……なのかな？）

お兄さんがくれると喜んで梨っぽいものを受け取る。味もやつぱり梨っぽい。さっぱりして美味かった。

「それ、魔法ですか？」

あんまり質問はしないようにしようと思つていたけど（ウザがれてもいけないので）好奇心が抑え切れず、つい聞いてしまった。ら、お兄さんは一瞬びっくりしたように動きを止めた。

（…もしかして聞くのもバカらしきぐらいの常識？）

「…ああ。これは循環の魔法がかけられている。収納したいと願えば勝手に収納されるし、出したい時はその物を思い浮かべながら

出したいと願えればいい。

入れ物自体は小さいが、中の空間は広いからどんな大きな物も入れられる。」

あ～…簡単に言つと、四次元ポケット的なアレか？

「荷物がかさ張らなくて移動するのに便利そうですね」

いいな～欲しいな～

異世界トリップの主人公たちはたいてい自分で作つたりしてたけど…

オレは魔力あんまりないから作れないだろうじ。

売つてたりとかすれば買いたいところだ。

…あまり高いなら買えないけれど…なんて考えてたら、

「大手のギルドなら、登録すれば貰える」

お兄さんが親切に教えてくれた。  
なんだ。それを早く言つてくれ。

「…もしかして君は魔法の使い方を知らされていないのか？」

…知らされるもなにも…

魔力があんなに少ないと魔法は使えないものなんじゃ…？  
と、いうことをそのまま伝えたら、

「世界から祝福と加護を与えられた者が、魔法が使えないなんてことはありえない」

だそうです。

マジで？オレ魔法使えるの？

いやった

っー！

希望の光っ

やっぱり使ってみたいもんな！魔法っ！

## 掴め！？幸運のラッキーハイキング《5》

と、いうことで。

魔法の使い方をお兄さんに翻訳したことになった。

なにから今までお世話になります。多分お兄さんには一生頭が上がらないと思います！

「まずは… そうだな… 魔力の総量から説明したほうがいいか…」

そう言って、お兄さんはベルトの小物入れから陶器（だと思われる）のコップをとりだした。

「魔力の最大容量というのは生まれたときからだいたい決まっている。例えば、このコップが人一人分の最大容量だとすると…」

言いながらお兄さんはコップのフチぎりぎりまで水を入れる。

（…「ど」からその水を出したのかとか突っ込んだらダメかな…）

おそらくそれも魔法なのだろうが…

「このコップ一杯分が魔力の最大総量になる。

魔法によって魔力の消費量は変わるが、使えば使うほど減ってしまうから補充をしなければいけない。

だがどんなに頑張つても、魔力の最大総量はコップ一杯分にしかならないゆえに、それ以上の魔力を消費する魔法は使うことが出来ない。

説明しながら、「コップに入った水を減らしたり増やしたりするお兄さん。

…さつきからお兄さんは魔法を使っているが…大丈夫なのだろうか…説明を聞くかぎり、使えば使うほど魔力は減るから補充しないことやバいといつ意味に聞こえるんだけど。

「補充つてどうやるんですか？」

「食事や睡眠…あとは日光浴とかだな」

ああ、深沢が言つてたのはやっぱり魔力を増やす方法じゃなくて回復する方法だつたんだな。

…しかし、日光浴？

「ひつやつて自然に囲まれた場所にいるだけでも魔力は補充される」

へ……そりなんだ。

だからお兄さんは平気そうにじてるんだな。

「魔力の最大容量は一生変わることはない。…が、まれにそれを増やせる者がいる」

増やす？

増やせるのか？

それは是非とも聞きたい！

オレの魔力は少ないからな

もう少ししあつたほうが魔法も使いやすいと思つし…

「オレつー！オレも増やせますか？」

勢によく聞くオレに、お兄さんは苦笑して頷く。

「ああ。君は世界から加護を受けている。やり方次第で増やす」と  
が可能だ

「どうやって増やすんですか？」

「…………まあ？」

「…………は？」

今、お兄さん、まあ？って言った？

「増やし方は人によって違つよつだ。いろいろ試してみるとこい」

ええ  
マジかよ……

「で、肝心の魔法の使い方だが……  
基本的に魔法を使うのに必要なものは、『魔力』と『想像力』と『  
きつかけ』だ」

魔力と想像力まではわかるけど……  
きつかけって何だろ？

「例えば……」

と言しながら、お兄さんはコップを示す。

「ここの水を増やそうと思つたら、

水が増えることを想像して、『増えろ』と言つ

「めりかけって…呪文ってことですか？」

「…呪文のほうがわかりやすいこと多いんだ」

お兄さんが言つには、呪文でなくとも、何かに触つたり手を叩いたり…とにかく自分が『魔法が発動するきっかけ』だと認識できるものであれば何でもいいらしい。

やつてみるとばかりに、お兄さんがコップを差し出してきたので受け取る。

「…『増えろ』」

想像して呪文を口にしたとたん、大量の水が頭上から落ちてきた。

ザバアって。マジでザバアって！

おかげで自分だけじゃなく、膝で丸まつてたビィと隣にいたお兄さんもずぶ濡れになってしまった。

……なんで？

「ググウつ」

ビィが不満そうに鳴く。

「…」めん

「マジで！」めん

落ち込んでいたら、お兄さんが魔法をかけてくれたらしく、きれいに服もまわりも乾いていた。

「さすが世界に祝福を受けし者だな。精霊たちが君の期待に応えようと張り切りすぎたようだ」

……この世界、精霊がいるの？

それは見てみたいな……

……なんて、現実逃避してみたり。

「……すみません」

オレが謝ると、お兄さんは気にしているのかのように笑んだ。

「最初から上手くできるとは限らない。……が、しかし。君の今現在の魔力総量がどのくらいかわからないというちは、あまり魔法は使わないほうがいいだろう。

……少しずつ慣らしていくばいー

うう……お兄さんの優しさが皿に染みる……

「……もう少し時間だ。戻りつ

え？！もうそんな時間？

じゃあ寂しいけど、ビィとは「こ」でお別れだな。

そう思つてビィを帰そうとするのを、お兄さんが不思議そうに見ていた。

「連れていかないのか？」

いやいや。連れていくべきですか。

「自分のことちやんとやれるかわからぬですしそれでこくの  
はまよひと……」

と、言葉を濁したら、お兄さんは少し考へた後、はつきりと聞いて  
きた。

「お金の問題か?」

「それもあるけど……」

野生の動物が懐いたからつて連れていいくつて発想もどうかと……

「……」れを

と言つてお兄さんは例の小物入れから宝石つまみ物を取り出して渡  
して来る。  
思わず受けとつたけど……  
どうしようと……

「ギルドに持つていけば換金してくれる」

「えー?」

「それなりの金額になるはずだ。当座の生活費にすればいい」

ええ? いいのかな?

そりやオレとしては助かるけど……

オレの口悪さを感じたからか、お兄さんは条件をつけてきた。

「ただし。そのハシキービングを連れてこへ」と。換金して得たお金は『サロク・ロクフ』国内でのみ使うこと

ビィの正式名は「シキービング」だつたのか。……じゃなくて。  
サロク・ロクフってどーじる？

「サロク・ロクフは私の国だ。三國の一つ、一番治政が悪ことじんな  
のだが……」

「ここにへやつてあるお兄さんを遮つて聞いてみる。

「オレが生活してこへのは難しい所なんですか？」

「……こや。余程運が悪くなじかきつ、普通に生活する問題は  
ない」

「ふへん？」  
「なら、その国にまづ行つてみるかな？」

「じゃあ、その国に行つてみよつと悪いまつ。お兄さんの国がどん  
なところか見てもみたいです」

とオレが言つたとたん、お兄さんは動きを止めた。

「……また変なじじ言つたかな？」

「…………お兄さん？」

お兄さんがぎこちなく聞き返してくれる。

「あ、しまった。口がすべった。

まづいなー怒られるかな?と思つていたら、お兄さんは笑つて許してくれた。

「そんなふうに呼ばれたことはないから新鮮だ」

と言つてくれた。

名前で呼ばれなくてもいいなんて…変わつた人だ。  
でもいい人だ。

「あ、オレはゼンです!…挨拶が遅くなつてすみませんっ」

今度は挨拶するとかバカだろオレ…

よし!

最初の行き先はサロク・ロクフで決定だな!  
どんな所なのかな?ワクワクしてきたつ

## 掴め！？幸運のラッキーピッグ『6』

森の入り口でお兄さんと別れて、最初のスタート地点まで戻ると、すでに選抜は終わっていた。

金髪美少女たちと談笑してたらしい深沢はオレに気づくと走り寄つて嬉しそうにピースしてみせた。  
どうやら作戦は成功したらしい。

「高崎もラッキーピッグ捕まえられたんだね」

「…？ も、って？」

深沢が何を言いたいのかがわからず、聞き返す。  
ちなみにビィは器用に左肩に乗つていて。

「…高崎、ちゃんとの大会のルール聞いてた？ ラッキーピッグを連れ帰れた人が合格なんだよ？」

……聴いてませんでした。

「…ん？ あれ？ 高崎、じつちの言葉を話してる？」

お。気づいたか。

「オレの目的はラッキーピッグじゃなかつたからな～」

深沢を真似てピースしてみせた。

お互の目標が達成されたことに一人で喜んでいたら、不合格だつたらしい皆様方がものすごい目つきで睨んできた。

…不合格になつたのはオレのせいじゃないんだけど？

「行けりへ、高崎。もつすぐタジ飯だつて」

深沢の誘いに頷き、建物の中に入ると、朝お世話をしてくれたメイドさんが出迎えてくれた。

（…）のメイドさん、もしかしてオレ専属？）

なんだか少し恥ずかしい。  
オレただのおまけなんだから、そんなにじたくれなくていいのに  
…とか思つてしまつ。

「あ、深沢。オレ、明日サロク・ロクつて国に行かへから」

今日でお別れと囁つオレに、深沢もメイドさんもびつくりしてゐ。（とこりかメイドさんはオレがこちから世界の言葉を話してゐる）と  
に驚いてた）

…いきなりすぎたか？

「なんで？魔王討伐は？」

いや、それは行かなつて言つたよな？

深沢（と、ついでにメイドさん）は、この世界で生きていくと  
決めたことを伝える。

深沢はなんだか納得いかないつたが、オレの決心が本気なものだと理解してくれたらしく、最後には応援してくれた。

……のはこいんだけど。

その後が大変だった。

明日は勇者一行が魔王討伐に出発するので今夜はパーティーのようなものをするらしく、メイドさんたちや執事さんたち使用人ぽい人々はその準備に大忙し。

なのに。

オレが明日に出ていくと言つたばっかりに。  
メイドさんたちもさらに大慌て。

オレ用の装備を用意するから、それを是非着ていつて欲しい、と言  
われてしまった。

どうもここの人たちはオレに罪悪感のようなものを持つてゐるみたい  
だ。

別に巻き込まれたのは誰のせいでもないのに…気にしなくていい  
のにな。

……つていうか、装備つて?

そんなにこの世界は危険なの?

お兄さんはそんなこと言つてなかつたけどな

「あの、タジ飯は部屋で食べてもいいですか?」

メイドさんに聞くと、笑顔で了承してオレの分の食事を取り分けて  
部屋まで持つってくれた。

だつて関係ないオレがパーティーに出るとかどうかな~と思つたし  
:(忙しいのに余計な手間をかけてメイドさんには申しわけなかつ  
たけど)

ちなみにメイドさんにビィに何を食べさせたらいいかを聞くと、オ  
レと同じものでいいらしい。動物なのにグルメだな。

「好き嫌いは示しますので、食べたがっているものを差し上げてく

ださい」

そんな甘やかした育て方でいいんだろうか…

「ラッキービッグは幸運を呼ぶと言われています。あまり束縛したりせず、好きに行動させていたほうが、幸せへの近道になるのだそうです」

メイドさんが笑顔で教えてくれた。

へ～そうなのか。

食事も完食して満腹感に浸りつつベッドに横になる。ビィもベッドに飛び乗り、枕の横に座り込んだ。

「サロク・ロクフってどんな感じだらな？」

オレの言葉に、ビィは耳をひくひくさせて反応する。耳元を撫でたら気持ち良さそうに目を開じた。

そんなビィを見ていたら、睡魔は当たり前のようになってしまったので、サロク・ロクフがどんな所かも想像する間もなく…

あ～とこ～う間に眠りについた。

「この世界を選んでくれた君へ出来る」

ラギ視点

『サロク・ロクフ』の新王。

ゼンからはお兄さんと呼ばれている。

勇者召喚の儀。

それは理の中に組み込まれた誰も介入の出来ないもの。失敗などあるはずがなかった。

しかし。

今回の召喚には予定外の存在まで一緒に召喚されてしまった。何故、と理由を問うても誰も答える事など出来ない。元の世界へ帰れるかどうかもわからない。  
…彼には諦めてもらいうしかないと。

「あら、なんて可哀相な口かしら。同情しちゃ~う」

可愛い（と評判らしい）声で『リウナ・リイナ』の王は感想を述べる。

だが言葉ほどには興味はない様子だ。そもそも彼女は魔王討伐にも興味は持っていない。

「軟弱そうな子よの。」

『ハイレ・ハイネ』の王が女性にしては低めの声で述べる。別名『武の国』と云われるだけあって、その女王も強い者にしか興味を持たないようだ。

「私は勇者の指導で手一杯ゆえ、どちらかが彼の子の世話をしないや魔王討伐へ赴く勇者を導くのは『ハイレ・ハイネ』の王の役割だ。今回の件に関しては私が、『リウナ・リイナ』の王のどちらかが対応すべきだらう。」

「ええ～？あたしが思つた～、あのロゼんなに長くないと思つナビ？」

自分は関わりたくないと言いたげな声。…つまり『リウナ・リイナ』の王は私にやれと言いたいのだろう。

「…では私が…」

断る理由もなかつたので、了承の意を送る。

それを合図に、その場に響いていた声が気配と共に途絶えた。

（……引受けたはいいが…）

世話とは…何をすればいいのだろう。『リウナ・リイナ』の王の言うとおり、彼に残された時間は長くない。

魔力測定のときの総量から、異世界の彼は、次の日の日覚めは難しいだろうと思われた。

魔力を補充している様子がないのだ。早晚、尽くるだらう。

魔力がなければこの世界では生きてはいけない。

……と思っていたのだが。

次の日の魔王討伐メンバー選考大会に元気に参加しているのは何故なのだろう…。

気になつたので、後をつけてみると、なぜか他の参加者たちから追い掛けられていた。

誰かを潰せばその分、己が合格する確率が上がるとでも思つているのだろうか？

愚かしい。

彼を助けようと、魔法を使おうとしたのだが、追つ手の参加者たちは次々にトラップに引っ掛けかっていく。

足元に隠されたロープに引っ掛けられたり、頭上から粘りのある液体が落ちてきて身動きできなくなったり、……なんだか今回のトラップは子供の悪戯のような内容だが、その分タチが悪い。

それにしても…先に通つた彼にはトラップは作動しないのに、後から通つた追つ手共にはしつかり反応するのは何故なのか。

(トラップ自体が相手を選んでる?…そんなまさか…)

術者が近くにいないのにそんな高度な魔法を使える者がいるわけ…

……勇者になら可能かもしれないが、それこそまさかだ。する意味

がないだろつ。

とにかく、私が手を出す」ともなく、追つ手共は脱落した。

おそらく道がわからなくなつたであろう彼に、話しかけて道を教えるべきか迷つてゐるうちに、彼は何故か鳥に遊ばれていた。

思わず笑つてしまつた。

今大会用に用意されたラッキービッグの餌を、鳥にやるとしていたらしいので、それは鳥の餌ではないことを伝える。

……言葉が通じないのはけつこう不便だ。

言葉が通じるよつに祝福の魔法をかけよつ。彼も不便だと思つてゐるかもしけない。

祝福の魔法は初めて使うから成功するか不安だが。  
きつかけの一重がけをしてみよつ。成功率が上がるかもしけない。

彼はいきなり口づけられたことに驚いていたようだが。

やはりやり方を間違えただろうか。

……成功したから良しとしよう。

やつと普通に話せるよつになつて、疑問に思つていていたことを聞いてみた。

話を聞くかぎり、どうやら世界に祝福と加護を『えても』ひつたようだ。

どうか。加護を得たのか。

「それ、魔法ですか？」

彼のその言葉に驚いた。

そうか。彼は魔法についてもこの世界の常識も何もかも知らないのだ。

わかつていたはずなのに、それをきちんと理解してなかつた自分に愕然とした。

不便だらうからと、自分の都合で解釈して同情して勝手に魔法をかけて勝手に自己満足して…相手のことを何も考えていなかつた…なんて傲慢だらう。

己が恥ずかしい。

『まかすよつに魔石を渡す。かなり高密度の魔石だからいい値段で売れるだらう。

お金で解決したよつで後味が悪い気がするが…

ついでに自國へ誘導してみる。そのほつがいろいろ融通をきかせやすいだらうから。

しかし、遠回しだが、私が『サロク・ロクフ』の王だと言つたのに、彼は私の祖国がそうなのだと受けとつたよつだ。

…間違ひではないのだが。

しかも私のことを、心中で「お兄さん」と呼んでいたらしく、名乗つていないので名前を呼ばれないのは別に気にしないが…まさかそんなふつに呼ばれるとせ。おもしろすがれる。

弟がいたら、こんなかんじなのだろうか。

楽しい。と思う。

彼はそんなふうには思っていないだろうが…

そうだな、弟ができたつもりで接してみよう。

世話を言われても何をすればいいかわからないしな。

「今日、私と会つたことは誰にも言わないで欲しい」

あんまり手を出しそぎてもあの一人の王は何か言つてもやうだ。  
他の者たちにも下手に騒がれてしまいたくない。

王と面識があることが、良い方向の事柄に繋がるとも思えない。

「秘密ですねっわかりました！」

清々しい程の笑顔で彼、ゼンが答える。  
素直な子だ。

兄のように。見守りうと思える。  
せめてこの世界に慣れるまで。

この世界を選んだことを、後悔することのないよう

## 遭遇？ミルミルと海の精霊石 『1』

出発は深沢たち勇者御一行になつた。当たり前か。

彼らは、深沢が作ったらしい光の門をくぐり、魔王がいるとされる『ハイレ・ハイネ』国に向かう。

魔王討伐へ行く深沢たちを、広場にいた大勢の人たちと見送る。門をくぐる直前、深沢は振り返りオレを見つけると少し笑つた。別に仲が良かつたわけではないけれど、これが最後の別れになるのだと思うと寂しい気がする。

深沢もそう思つたんだろう。笑顔に元気がない。

オレはわざと軽い笑顔で『頑張れ』の意味を込めて片手を上げる。オレも頑張るし。

「ん、じゃあ、オレも行きますか！」

声にしてから、もう一度建物の中へ入る。

さすがに勇者たちを差し置いてオレの準備を優先してほしいとは言えなかつたので、まだ装備品を受け取つてなかつたのだ。

（装備品つて…鎧とかかなー？あんまり重いと着れないかも…）

そんなときはせつかくの好意だが丁重にお断りしよ。と思いつつ部屋に戻ると、メイドさんがすでに用意してくれた。見ると普通の服っぽいので安心した。

「こちらの服にはいろいろと魔法を織り込んであります。」

失礼ですがあまり耐性がおありではない様子だったの…とメイドさんが言いにくそうにして呟く。

誰に耐性がないって…オレだよな…

魔力の少ないことや剣を持てる程の力もないことも知っているメイドたちには気を使って服に耐性を上げる（補うへ）魔法をかけてくれたらしい。感謝だ。

用意されていたのは、長袖の白い綿のシャツに、下は黒のズボン、靴は編み上げ式のショートブーツ。着てみるとすこく軽く感じる。動きやすい。その上に膝丈の薄手のコートを羽織り、ウエストポーチっぽいものをベルト代わりに巻き着ける。お兄さんから貰った宝石っぽいものはその中に入れた。

（おお～いいかんじ～）

なんかいかにも旅立ちーとこいつ気がしてテンションが上がる。ビィも興奮しているのか、長いしつぽの先をぱたぱたさせてくる。

「よくお似合いです。

どこか違和感などはござるませんか？」

着替え終わったオレを見て、メイドさんは笑顔で聞いてくる。

「あつがどうぞります。とっても着心地がいいです！」

服を貰えるだけでも有り難いのに、魔法までかけてくれるなんて、感謝してもしきれない。

こちらのお金を持っていないので、正直どうしようかと思つていた

のだ。

「あの、『サロク・ロクフ』って遠いんですか？」

お兄さんから貰つた宝石っぽいものを換金すればいくらかになるみたいだけど、これは『サロク・ロクフ』ではないからどうみち使えない。

そこまで行くべれべらにかかるのか……

「塔を出でしひばり歩くと『転移門』があります。それを通ればすぐ『サロク・ロクフ』国ですよ」

転移門が何かと聞いたら、さつさと深沢が出でした光の門のことひじい。

遠い場所に一瞬で行けるようだ。

なんだ。すぐなのか。

だつたらお金の心配はしなくてもよさそうだな。

じゃあ、すぐと行きますか。

## 遭遇?『ルミルと海の精霊石』②

建物の入口まで見送ってくれたメイドさんと別れ、転移門までの一本道をてくてく歩く。

ビィは定位置と決めたのか、左肩で大人しくしている。

道の両脇は緑に囲まれ、朝の空氣の残る景色に心がはずむ。いよいよ新生活が始まるのだ。

ドキドキするのが当たり前!な気分で歩いていたら、白い壁の建物が見えてきた。

「…」

きょろきょろしながらその建物に入ると、中には一人の女性がいて、「こんにちは」と素敵スマイルで挨拶してきた。

二人とも同じ服を着ているから、きっと受付の人たちなんだね。

「こんにちは。あの、『サロク・ロクフ』に行きたいんですけど…

「はい。『サロク・ロクフ』への転移は5万ソルになります」

……なんだと?

ソルってお金か?お金がいるのか?

「島の方ですか?この島ではあまりお金は使用されませんのでご存知ないのかもですが…他の国ではお金がないと生活できないんですね」

地元民と勘違いしたらしく、受付のお姉さんは親切にも説明してくれ

れた。

「どうか。JUNは島なのか。

お金の流通がないくらいに田舎つてことだらうか。

自給自足の物々交換で生活してゐつてことなのか?

…もしもしそうなら、お兄さんに貰つたあれも換金出来ない。

（お金がいるなんて聞いてないんだけど…）

いや、ちゃんと聞かなかつたオレが悪いんだけど…

お金はかかるないんだと思い込んで話題を振らなかつたのは失敗したな～。

「あの…、船で行かれてはどうですか? お値段も転移門より安いですしね…」

オレのあまりの落ち込みぶりに、お姉さんたちは同情して声をかけてくれる。

「交渉しだいではもつとお安くなるかもしませんよ?」

お。交渉できんの?

「転移門は国の施設なので割り引きできません…申し訳ありません」

二人とも本当に申し訳ないといつ表情で頭を下げるのをオレは慌てる。

「えつ、いえー気にしないでくださいー!  
教えてくれてありがとうございました。そっちに行つてみますー。」

お姉さんたちに港のあるところを聞き、再び歩きだす。港までは一本道なので迷うことないので、あつらひつらと景色を楽しみながら歩く。

転移門を過ぎたあたりから野が広がりはじめ、畑があつらひつらに見られた。

（何作つてあるんだる？）うちの野菜とか、どんな形してんのかな（）

と思つていたら、目の前から人がやってきた。

たくさんの野菜？が詰められた大きな籠を抱えたおばさんだ。

重たげもなく運ぶおばさんに、思わず尊敬の眼差しを送つてしまつ。

「うんにちは」

笑顔で挨拶すると、おばさんは豪快に一カツと笑つてくれた。

「試験を受けに来た人かい？」ここにいるひとは落ちついたのかい。まあ氣を落とさずに頑張んな！」

訂正する間もないくらいの早口で言つて、おばさんは野菜の一つをオレにくれて去つて行つた。

…風のような人つてああいう人のことなのかもしれない。

貰つた野菜？を一口かじつてみる。見た田舎ピーマンっぽいけど中身はしつかり詰まつてた。

シャキッとしてて、みずみずしくておいしい。生でも食べられるものようだ。

「ピマ。食べるか？」

「グ」

早くくれとばかりの返事に笑いつつ、ディを腕に抱き直す。さすがに肩の上で食べるには危ないからやめてほしい。

ぶらぶらと歩き、ちらちら見える民家を横目にしながら進むと、大きな船が見えてきた。

「おお～つ～船！」

回りで慌ただしく出港準備をしている人達。申し訳ないけど、その中の一人を捕まえて訴えてみる。

「あの～『サロク・ロクフ』へ行きたいので船に乗せてください～」

交渉なんてどうやつたらいいのかわからなかつたので、直球で言ってみた。

「5千ソルだ！」

怒鳴り返された。ので、オレも大声で言つてみる。

「お金は持つてません！」

……呆れた視線で見られてしまった。  
だつて持つてないものはないのだ。

「…おい。いくらなんでもそりゃ無理だろ」

「……ですよねー」

笑つて「まかしたが…  
困つたな~

お互に「どうしたらここのかわからず、『氣まずい雰囲氣』になつたら、『うつうつ』い体格のおじさんがあつてきて笑つて言つた。

「……ザツラツ キービッグがいるんなら船旅も楽になるだろうしな

おお。本当にラツ キービッグは幸運を呼ぶんだな。

「本当にですか？ ありがとウレコますー。」

「おひー！魔物が出たら頼むぜ坊主ーーー。」

と、背中を力いつぱい叩かれた。痛い。  
てこりか…

(……魔物？出るの？)

いやいや。それは無理っしょ。

## 遭遇?『ルミルと海の精霊石』③

積み荷を運び終えた船は、ようやく『サロク・ロクフ』へ向けて出港した。

そんな中オレはといつと…

「おー!坊主!これを向こうへ持つてけ!」

「あれ取つて来いつ!」

「今度はこっちだ!」

… いき使われ中です。

船に乗つたのはお昼前で、日が暮れるまでの約半日ずっと走つぱなしだつた。

タダ乗りだからじょうがないけど、明日は筋肉痛間違いなしだな。

「おつかれさん」

薄暗い中、他の乗組員たちと夕食を食べていると、オレを船に乗せてくれた人（船長さんだった）が声をかけてきた。

「今日は頑張つたみたいだな。明日もよろしく頼むぜ」

笑いながらの言葉の中に、からかいが交じつているような気がする

…。

…もしかして、今日のうちにそんなに頑張らなくても良かつた?

船長が去ると入れ代わりに、人懐こいやつな男の人が近づいてきた。簡易的だけど鎧を身につけ帶剣している。年齢は20前後に見える。冒険者かな？

「よ。お前、アレだろ？コイ様のお氣に入り」

「ユイ？…あ、深沢のことか。

「別にお氣に入りつてわけじゃ…」

「…どうか。回りからはそんなふうに見られてたのか。だから睨まれたのかな？」

「ふーん？あ、俺はリノ。勇者様がどんななんか見たくてあの島に行つたんだ。

「お前は？試験に参加してたっぽいけど」

「…どう突つ込めばいいのか…」

「勇者観光？」

「オレはばゼン。参加つていうか…楽しそうだったからまぜてもうつたんだ」

「…そう言つたら笑われた。勇者観光のほつがよつほどおかしいと思つが。

「それにしても、今日のお前、頑張りすぎだぜ？」

リノから言われて、やつぱりと思つ。ひつも乗組員たちが面白がつ

て仕事をさせてたらしい。リノはそれを見ながら笑つてたらしいが。

「教えてくれてもよかつたのに…」

そう言つて情けなくテーブルに突つ伏すと、リノは笑いながら謝つてくれた。

「悪い悪い。

ほら機嫌直せつて。甲板でゲームやつてるから俺らも混ざりなづか」

リノがそう言つるので甲板まで行くと、乗組員や乗客が一緒にいたなつて何やらやつっていた。

近づいて、リノにやろひぜと言われたけど、ルールも知らないし、それにビリやらお金をかけているようだ。お金なんて持つてゐるはずない。

それを伝えたら、リノが気前よくお金を貸してくれた。…初対面の人にお金貸すなんて何考えてるんだろう？

ルールは、三枚のコインをカップに入れてテーブルにひっくり返すだけ。コインの表が何枚上を向いているか当てる簡単なゲームだ。

要は運試しゲームなのだが…

ラッキービッグ効果なのか、オレは全勝してかなりの金額を儲けてしまつた。

(お～オレつてば金持ち～。人のお金だけど)

おかげでこいつらのお金について知ることが出来た。

- ・白貨
- ・金貨（50枚で白貨）

・銀貨（20枚で金貨）  
・銅貨（10枚で銀貨）  
・半銅貨（5枚で銅貨）  
(白貨:500万ソル)  
(金貨:10万ソル)  
(銀貨:5000ソル)  
(銅貨:500ソル)  
(半銅貨:100ソル)  
…と、まあこんなかんじ。

白貨より上の硬貨もあるらしいのだが、一般には出回らないらしい。

「はい。お金返すね。ありがとう。すげー楽しかった！」

借りた分だけじゃなく、儲けた分すべて返したのでリノは驚いていた。

だって元々オレのお金じゃないし。ないはずのもので稼いでもな。

リノは呆れてたけど。

「じゃあお休み~」

眠りこけてたビィを抱いて、船室に入る。

つていつてもまだ夜になつたばかりだから眠くはないんだけど。明かりは節約のためにあまりつけないらしく、船室の中は薄暗い。作り付けの窓から差し込む月明かりを頼りに進む。

窓から外を覗き込むと、暗いはずの海に星のような光りが煌めいて見えた。

青みがかつた緑の光り。その光りが、それこそ星のようなくたくさん

輝いている。

「うわ。 すげー」

ビィや他の人たちを起こさないよつて声をひそめて呟く。

「こじがオレの住む世界なんだな。  
と、感動と共に、改めて思った。

## 遭遇? ミルミルと海の精霊石 《4》

次の日。

昨日のことが嘘のようにゆつたりとした時間が過ぎていた。  
幸いにも筋肉痛には襲われなかつた。

メイドさんたちに貰つた服の効果かもしれない。

ぼーつとしていたら、料理を作るのを手伝つてくれと言われたので  
食堂へ行く。

「おう。坊主、これをテキトーに切つて鍋ん中に入れてくれ

そう言われて見ると、芋が山積みになつていた。

(…え? これ全部?)

皮は剥かなくていいらしいので、そのまま一口大に切つていく。

切りながら世間話として昨日の一人勝ちの話などをしていたが、ネ  
タがきれて黙つたままもくもくと芋を切つていく。

(…飽きてきた)

何か話題はないだろうか? 話していれば気も紛れる。

(…向ひの世界の話なんしても通じないだらうしな~)

何かないだらうか? と思つて鍋を何気なく見たら、ビーも見覚えのある料理が出来上がつとしていた。

(あれつて昨日食べた料理っぽいけど…?)

まだ仕上がりではないので、もしかしたら途中までの過程は同じで、これから別の物になるのかもしね。…でも気になる。

「あの、それつて昨日のと同じメニューですか?」

「おう。昨日どじりか、『サロク・ロクフ』に着くまでの一週間、ずっと同じメニューだぜ!」

オレがそう聞くのをわかってたみたいに笑いながら答えられた。

ずっと同じ? 一週間も?

味はおいしいんだけど…  
飽きそうだな)

料理人のおじさんは聞くと、船に積める物は限られるため、どうしてもそうなつてしまひぢりしこ。

「うう…せめて釣りができるば魚が取れるのに」

と言つたオレの言葉を聞いた料理人のおじさんは、だつたら取つて来たら夕食に出せるからよろしく頼むと言つてきた。  
おじさん、取れると思つてないな?

と、いふことで、昼食をとつた後、リノと一人で釣り糸を垂らす。

「あのやー、ゼン。動いてる船からやつて釣れるのか?」

釣竿の道具はリノに作ってもらつた。ギルドに登録していたらしく、あのなんでも入るやつを持っていた。お兄さんはベルトの小物入れだつたけど、リノのは細長い板だつた。あれがギルドカードになるらしい。

竿っぽいのと糸と針で手作り釣竿の出来上がりだ。

「どうかな~? 気合いでなんとかならないかな?」

こちらの世界では釣りはあまりやらないらしい。

釣れるまでのんびり待てないんだそうだ。

リノが釣竿を持っていたのは、漁師の息子で興味があつたからとりあえず道具だけ手に入れてみただけらしい。

「気合いね。この船、結構早いよ?」

そりなんだよね。この船やたら早いのだ。

動力は何なのだろうか?

「気分だよ気分~」

どうせやることがないんだから、ゆっくり釣り気分を味わつておこう。

…と思つていたら、船が大きく揺れた。

「うわつ~!」

「つーゼンー中に入つてろー!」

セーフリヤ、リノは船の前方へ走つていった。

(まさか、魔物?)

リノの表情は険しかつた。何かがあつたのかもしれない。もちろんオレに出来ることがあるとも思えなかつたので、ビィを腕に抱いて忠告通りに船室へ向かう。

直後、空氣を切る音が聞こえたので、感にしたがつて立ち止まる。

ダンツツ！――！

と、いう大きな音と共に巨大なタ「足」が目の前にたたきつけられた。

(でつかいタ「…?')

やつぱり魔物か！  
ど、どうしよう。

通路はタ「足」によつて塞がれている。ここを通らなこと船室へ行けないのに…。

どうしようかと思ひながら巨大なタ「足」を見ていたら違和感に気づいた。

(タ「足に鱗がある…)

え？タ「足に鱗あつたっけ？どどうでもこことこ氣を取られる。

田の前のタコ足が動かないのをじっと、オレは触つてみるとした。

（おお～スベスベだ。ぬめつてない。鱗キレー）

我ながら危機感にいたしことは思つが、このタコ足が危険だとは思えないのだ。

（攻撃するつもりじゃない氣がする。…んー、何かを訴えたがつてる感じ）

根拠はないが、そんな氣がする。

「グ～」

そんなことを考えていたら、二つの間にかビィがタコ足の上にいた。

「お、ビィはチャレンジヤーだなー。」

ビィはオレを見た後、タコ足を本体のまへ登つてこべ。そして時々振り返る。

「ついて来いつてことか？」

「グウ」

まあ、タコ足は大人しくしてゐし、でかいから海に落ちりつてこともないかも？

とこうじとタコ足によじ登つてみる。鱗が滑り止めになつて、思

つていたより歩きやすい。

それでも落ちないよう気をつけながらビィを追いかける。

本体のほうに近づくにつれて、乗組員や腕に覚えのある乗客たちがタコ足の持ち主を追い拵おうと奮闘しているのが見えた。オレから見えるつてことは、当然向こうからも見えるつてことで…

「何やつてんだつゼン…早く降りてここ…」

リノに怒られた。

登つたのはビィが先なのに…

「ビィ。リノが怒つてゐよ。戻るゼー」

ビィはタコ足の根本らへんに座つてオレを待つていた。

タコ足の持ち主はそれがわかっているのか、他の足は動かしているのに、そこだけは動かそつとしない。

「何があるのか？」

結局オレも根本まで行く。ビィを抱き上げよつと膝を付いたら、ビィのいる場所の鱗と鱗の間に黒っぽい何かが突き刺さつていて、気づいた。

「なんだ?」「…」

それを抜いた途端、オレとビィはタコ足によつて投げ出された。

「うわっ…ビィ…」

空中でビィを掴んで抱き込む。そのまま甲板にたたき付けられるの

かと思っていたら、誰かが魔法で衝撃を和らげてくれたので、それ程痛い思いをしなくて済んだ。

誰か知らないけどありがとー。

タコ足の持ち主は用は済んだとばかりに去ってくれたらしく、その後オレは全員に叱られるハメになつた。

えー

オレばっかり叱られるってなんか納得いかない…

## 遭遇? ミルミルと海の精霊石 《5》

翌日。

結局叱られるだけ叱られたオレに残されたのは、あのタコ足に突き刺さっていた黒い物だけだった。

タコ? の魔物はミルミルという名前らしい。可愛いじゃないか。

普段は大人しいが、たまに襲ってくることがあるため、油断は出来ない相手らしいが… 昨日のやつは、その黒いものを取つてほしかつただけらしい。

「で、これ何なの?」

釣竿は壊れてしまつたので、リノのギルドカードに入つていた網を海に投げ込んで釣りっこを楽しんでいる。

「海の精霊石だな。全体の色は黒だけど… 中に縁が見えるだろ?」

「海の精霊石だな。全体の色は黒だけど… 中に縁が見えるだろ?」  
言われて見ると、中心部に青っぽい緑色が透けて見える。  
夜に見た海の星空の色だ。

「海の精霊石は周囲の海に加護を与えると言われている。それがあれば船の安全も上がるって話だ。  
ま、多少はつてことだけどな」

「売れば金になる、と言わたが… いいのかな?」

「つーか、お前も手伝えよ、ゼン。お前が網でやるーつて言つ出しだんだぞ?」

見ると、リノが一人で網をあげようとしていた。  
精靈石を見ていて気づかなかつた。

「あ、こめん。

…重かつたんだな、この網」

海に落としたときには重いとは思わなかつたのに。

「こんなに重いのはおかしいつて。何か引っかけたんじゃないのか？」

リノと二人、唸りながら網をあげていたら、見兼ねた乗組員の人達  
があげるのを手伝ってくれた。ありがとうございます。

そしてあげられた網を見て全員絶句。

網の中には魚はもういる、いやなんやらわからないものが沢山か  
かっていた。

…重いはずだ。

「… わすがラッキービッグと海の精靈石だぜ…」

引き攣つた表情でリノが言い、回りの人達がそれに頷いた。

(え? そうなの?)

ビィを見ると器用に肩の上で眠つていた。

…いつの間に寝たんだ。

とつあえず、仕分けてみるとした。

魚や貝などの食べられそうなものは食堂に運ばれた。今夜の夕食は豪勢なものになるだらう。

他には、珊瑚？のようなものがあり、薬の素材になるらしいので、欲しい人に分けて、残りは後で売ることにする。

その他にも素材になるものがあつたらしいのでそれも纏めておく。

残つたのは装飾品の数々。

海の中にあつたので鎧びたりしているものもあつたが、売れるレベルだといつのでこれも売ることにしよう。

「ナイフかな？」

装飾品の中に短刀のようなものがあつたので手に取つてみると、鎧びてるひしべ鞄から抜けない。

「研ぎに出してみな。キレイにしてくれるぜ」

そう言われたので、それだけは別にしておく。  
ナイフは何かと使えそうだしな。

「いきなり大金持ちになつたな」

楽しそうにリノが言つてくる。

ん~…嬉しいといえば嬉しいんだけど…  
あんまりツキすぎても怖いな…

ビィはともかく、海の精靈石のほうは早めに手放そう。

「大漁だね~」

言われて見ると、優しそうな外見の男の人がのんびりと歩いてきていた。

昨日オレが甲板にたたき付けられそうになつたとき、魔法で助けてくれた人だ。若く見えるけど、けつこう年上らしい。

「やっぱり君は精靈に好かれているね」

「そ、うなんですか？」

「君がゲームに一人勝ちした夜も精靈たちがコインをいじつていたしね」

「…そ、うなんですか？」

聞くと、あの夜、オレの答えに合わせるように、精靈たちがコインをひっくり返していたらしく。

負けた人たちはそれに気づかず、ムキになつた結果、散財するはめになつたようだ。

ズル勝ちしたってことか？

「そういうえば、船長がその精靈石を欲しがつていたけど、ゆずつてくれないかな？」

「お。ちよづかいい。

「はい。ビバヤ」

即座に出したオレに、リノは呆れた視線を送つてくる。

「…言つてみただけだつたんだけビ…まさか本当にもりぐれとは思わなかつたな」

こつちもか。

「別にいいですよ? 元々オレのじゃないですし」

船に乗せもらつたし、助けてもらつたし。

結局その日は夕方早いうちから豪勢な食事とお酒が出され、上機嫌な船長はかなり酔っ払つていた。

そして、ビィはあちこちから餌付けされて腹がやたらふくれていた。

で、結局、今日の収穫はいくらくらいになるんだろうか?

## 遭遇？＝ルミルと海の精霊石《6》

「ゼン、もうすぐ着くわ。『サロク・ロクフ』国、『シャイド』の街だ」

後半の船旅は特に何事もなく、迎えた最終日。昼前に『シャイド』の港に入港し、やつと『サロク・ロクフ』国へたどり着いた。

緩やかな坂の上に建つ、半円状になつた街だ。そのすぐ向こうは森になつていて、街道は左右、海に沿つて伸びている。

「着いたー！」

「グー」

船はあまり揺れなかつたけれど、気分的に陸に足をつけると安心感がある。

ビィだつときつとそういう声がする。

「はいはい。のんびり気分に浸る前にギルドに行くわー」

リノに頭を小突かれてよろめく。

例の戦利品は大漁すぎて一人では持ち運べないので、先にギルド登録してギルドカードを貰うことにしたのだ。  
もちろん戦利品はリノと折半予定だ。

「ギルドカードのこの部分、ここが信頼度を示して。白、赤、黒、

青、緑の順に信頼度が上がっていく。…まあこじらくんはギルド側がわかつてればいいから、無理に覚えなくていいぞ」

リノと同じギルドに登録することにしたため、ギルドカードについての説明をリノからしてもらひつ。

ちなみにギルドへの登録はすぐに済んだ。

港のすぐ近くにあったというのもあるが、申請書などは何もなく、ただギルドカードを貰うだけだったのだ。

受付のお姉さんとドキドキハプニングなどもなく、あっさりと登録は済んだ。

「ウチのギルドは登録してから一年間は見習い期間になる。報酬の何割かはギルドに取られるから注意するよ。… ていつてもゼンには今回の大金が入る予定だからな。あんまり気にせず好きな依頼を受けていけばいい」

他わからないことや、依頼の受け方等は明日教えてくれると書く。

「わかった

ということで戦利品を折半する。

リノはギルド登録祝いだと笑って殆どをオレのギルドカードに入れていったが。

「別にギルドじゃなくても買い取つてくれる場所はあるぞ。全部は売らずに小分けにバラ売りしたほうがトラブル防止になる

なるほど。勉強になる。

お兄さんも治安が悪いって言つてたし。刺激するよ。なことは、し

なこぼうがここってことだな。

「じゃあな。明日はギルドで待ってる。あんまり早くなくてここからな？」

宿を取るなら『菊花亭』がオススメだ。メシが上手いぞー

明日はギルドで待ち合わせの約束をしてリノは去っていく。実家がこの街にあるらしい。

オレも船長さんや乗組員のみんなに挨拶してリノに勧められた宿屋に行つてみよう。

どんな食事が出るのかな？

この世界の食べ物は当たり前だけ食べたことないものばかりなのでとても楽しみだ。

念願のギルドにも登録できたし。

食べ歩きツアーとかもやってみたいな

あ、その前に換金しないとだな。  
宿屋ついていくらぐらいなんだろ？

「グーウ

「お。腹へったか？んじゃ早く換金して宿屋に行くかー！」

「グッグー」

そんなこんで『サロク・ロクフ』でのオレとビィの生活が始まつた。

よしつ！

明日から仕事がんばるつー

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8579n/>

---

選ぶ世界のその先に

2011年2月9日09時09分発行